

Title	京大広報 No. 570
Author(s)	
Citation	京大広報 (2002), 570: 1293-1306
Issue Date	2002-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/196534
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



京大広報

No. 570

2002 .7



長尾総長と王駐大阪中国総領事



贈呈式に先だち歓談する関係者
関連記事 本文1296ページ

目次

再び全学に訴える

- 総合人間学部における

差別落書きについて -1294

大学の動き

第4回運営諮問会議開催.....1295

中国教育部から京都大学へ学術図書の寄贈.....1296

博士学位授与式.....1297

創立記念式の挙行.....1297

部局の動き

低温物質科学研究センターの設置.....1298

宇宙太陽発電無線電力伝送システム披露式及び

第2回宇宙太陽発電所シンポジウム.....1299

随想

カラコロムでのある夢語りから

一退役教官の方々への一提言

名誉教授 谷 泰.....1300

今にして思う京都大学時代

名誉教授 丸山 利輔.....1301

洛書

木の下 of 石碑 金 文 京.....1302

訃報1303

日誌1304

話題

総合博物館開館1周年記念行事

「総合博物館の展示を語る」を実施.....1305

文学研究科フォーラムを開催.....1305

お知らせ

総合博物館特別企画展始まる.....1306

編集後記1306

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

再び全学に訴える - 総合人間学部における差別落書きについて -

京都大学同和・人権問題委員会

5月31日（金）総合人間学部A号館北棟1階西男子トイレの個室扉内側に、また6月11日（火）には同じく総合人間学部A号館北棟1階東男子トイレ個室壁タイルに差別落書きがあることが確認された。その内容は、ある特定の個人と団体名を騙り、部落解放運動に携わる個人に対し露骨な差別用語を混じえて誹謗中傷するものと被差別部落出身者全体に対する卑劣な暴力的言辞を弄するものである。

本学は、今年度に入ってからでも「京大広報」No.567及びNo.568を通じて、差別落書きの非人間性、犯罪性を指摘し、全構成員に対して部落差別を初めとするあらゆる差別問題に対する認識を深めるとともに、差別行為の根絶に向けて一層の協力を求めてきた。それだけに、この差別落書きは、被差別部落出身者への人権侵害であるとともに、部落解放運動並びに本学の人権問題への取り組みに対する悪質な妨害にほかならない。本学としては、このような悪辣非道な差別行為を断じて許すわけにはいかない。

本委員会は、本学で差別行為が続発する原因・背景を究明し、差別解消のための取り組みをより一層強化してゆく所存である。

なお、総合人間学部長及び人間・環境学研究科長名による6月4日付け「警告」 資料1 と6月12日付け「警告」 資料2、6月14日付け「告示第4号」 資料3 を併せ掲載することとする。

警 告

5月31日夕方、A号館北棟一階西男子トイレの個室扉内側に、またもや差別落書きが発見された。ある団体の名をかり、露骨な部落差別表現で特定の個人を誹謗するものである。今年の2月以来、連続して4回目の悪質な差別落書きであるが、筆跡、内容からして、これまでと同一の人物が書いたものと推定される。かくも執拗に個人攻撃を繰り返し、差別を煽り立てようとするのは断じて許せない。このような落書きの書き手は恥を知るべきである。

総合人間学部では、2002年5月発行の広報No.31で、4月に発見された落書きの一部の写真を公開し、差別落書き事件に対する本学部の見解を掲載している。本学部・研究科の構成員の皆さんには、ぜひこれを読んで、この問題に対する認識を共有していただきたい。また、京大広報No.568をここに掲示しておく。

2002年6月4日

総合人間学部長 宮本盛太郎

人間・環境学研究科長 江島義道

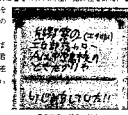
京大広報

2002 No. 568

再び全学に訴える - 総合人間学部における差別落書きについて -

3月20日（金）と4月1日（月）に総合人間学部A号館北棟1階西男子トイレに連続して、さらに4月10日（水）には同学部A号館1階東男子トイレに連続して、同じ人物の手によると思われる差別落書きが発見された。その内容は主に、特定の個人を名指しして部落差別表現で誹謗するものである。また、中傷するものである。その内容は前掲の通りで、同大広報No.31で公開した差別落書きの書き手と同一人物であると推定される。本学としては「警告」や「告示」で「京大広報」を通じて差別落書きの個人攻撃、誹謗性を断ち、書き手に恥を感ずるにせよとせず、それに対し、厳格な差別落書きの書き手に対しては、断じて許すわけにはいかない。ここに差別落書きの一例を公開する。

京都大学としては、この差別落書きの書き手の特定を初め、さまざまな差別行為の防止の一環として努力を重ねる所存であるが、攻撃的や中傷的であつても、彼らの人権意識の向上に努められるとともに、あらゆる差別行為の防止に努める所存であることと改めて警告するものである。



資料1

警 告

昨日6月11日昼頃、A号館北棟一階東男子トイレ個室で、またもや被差別部落出身者に対するものと思われる悪質な落書きが発見された。今回のものは、意図的に筆跡を変えたとみられ、ますます陰湿さを増してきたとしかいいようがない。差別落書きは断じて許されるものではなく、本学部・本研究科においては、本年2月以来度重なる差別落書きに対して繰り返し警告を発し、落書きの書き手に猛省を促している。それにもかかわらず、このような落書きが頻発することに、怒りを禁じ得ない。差別落書きの書き手に対しては、差別される側の身になって、自らの行いがいかなる暴力行為であるのかを考え、二度とこのような行為に及ばぬよう、断固として警告する。

2002年6月12日

総合人間学部長 宮本盛太郎

人間・環境学研究科長 江島義道

資料2

告示 第四号

平成十四年五月二十一日（金）、総合人間学部A号館北棟一階西男子トイレ個室扉内側に、そして六月十日（火）には同じく総合人間学部A号館北棟一階東男子トイレ個室壁タイルに差別落書きが発見された。その内容は、ある特定の個人と団体名を騙り、部落解放運動に携わる個人に対し露骨な差別用語を混じえて誹謗中傷するものと被差別部落出身者全体に対する卑劣な暴力的言辞を弄するものである。本学としては、このような悪辣非道な差別落書きを断じて許すことはできない。これは被差別部落出身者への人権侵害であるとともに、部落解放運動並びに本学の人権問題への取り組みに対する悪質な妨害にほかならない。この差別落書きの書き手は、自らの行為の犯罪性に気付き、即刻その行為を中止すべきである。本学は、ほぼ同一人物と思われる差別落書きの書き手の特定を初め、差別問題の解消のため一層の努力を重ねるが、教職員や学生諸君にあつても、差別問題に対する認識を深めるとともに、かかる差別行為の根絶にむけて格段の協力を願うものである。

平成十四年六月十四日

京 都 大 学

資料3

大学の動き

第4回運営諮問会議開催

第4回運営諮問会議が2月15日（金）に新都ホテルにおいて、井村裕夫委員長、青木昌彦委員、荒巻禎一委員、稲盛和夫委員、大南正瑛委員、大西正文委員、館 糾委員、中川久定委員、中坊公平委員、中村桂子委員の出席のもと、開催された。

なお、運営諮問会議の目的及び委員の氏名については、『京大広報』No.558（2001.6）もしくはホームページ（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/GAD/pid/simonkaigi.htm>）に掲載している。

主な意見

【現状と課題】

<二つの選択肢>

国立大学が法人化される場合、職員の身分を公務員型にするか非公務員型にするかの二つの選択肢があるが、非公務員型の方が法的な制約が少なく、優秀な人材の確保が図れるメリットがある。

京都大学はグローバルな観点から国策的な研究重点大学となって欲しい。そのためにも、教官、研究者の処遇の改革が必要であり、弾力的に対応できる非公務員型が望ましい。

<国立大学のメリット>

大学法人化の目的はコスト削減である。また、再編・統合についても総務省の進めている市町村合併のように単なる数字合わせが先行している。国立大学のメリットは、授業料など経済的負担を少なく、優れた人材を養成することにある。この本質と外れた議論がなされているのではないか。

<国民にわかりやすい改革を>

文部科学省と大学は積極的な緊張関係が必要である。護送船団方式の馴れ合い的な関係ではいけない。法人化の議論は文部科学省と大学の中だけでの議論となっており、国民向けのものとなっていない。タックスペイヤーに対し、わかりやすい改革をすべきである。

<ノーベル賞受賞者輩出の要因分析>

ノーベル賞受賞者は京都大学関係者が圧倒的に多い。法人化に向けてさらに発展させるためにも、その要因を分析することも必要ではないか。

<人材の効率的な配置・活用>

国立大学の事務組織は私学に比べ非効率的であるとの指摘もあり、大学の運営組織を大幅に変えるなどし、人材の効率的な配置・活用を図る必要がある。法人化された場合、職員の採用は大学の役員会が全て決定することとなり、有用な人材の確保など一切の責任を担うこととなる。

【教養教育】

<学生の授業以外のときの実態把握>

外国語教育に関し、会話中心の授業が多く、文法の重要性を認識している学生が少ない。言語には構造があるということが理解されていない。ある西洋哲学の先生は、学生は漫画は読むが本は読まない。また、授業で提供された本は読むが古典は読まないと嘆かれている。学生が授業以外のときに何をして過ごしているかという実態を把握してみることも一つの方法ではないか。

<入口の段階での教育>

アメリカの大学においては、1・2回生段階では文科系・理科系の区別はない。共通の知識を入口の段階でどのように教育していくのかというシステム構築が大切である。「高等教育研究開発推進機構」の設置を予定しているようであるが、「仏作って魂入れず」とならないようにしていただきたい。

<物事を見る目線>

どういう視点で学生に教養を身につけさせるかが課題である。ありとあらゆるものをみることができる力、そしてその中から物事をどう判別できるか、どう構想できるかという力が必要である。試験を課

してばかりでは本質を見分けることができない。また、現場に立たせることも重要であり、その時に物事を見る目線をいかに下げさせるかが倫理観を持つ人材の養成につながる。それは教える側の先生が何に立脚して教えているのかにも関わってくるのではない。

倫理観のある人材の養成が非常に重要である。この観点での教育には力を入れていただきたい。そのためにも教育評価の実施は是非とも必要である。研究面では学会という組織があるが教育面にはそのようなものはない。評価体制を充実して欲しい。

<新しい「知」>

単にディシプリンを教えれば良いというものではない。現代は新しい「知」が作られる変革の時である。「今どういう知が作られ、社会の価値観がどう変わり、それに対してどう教育していくのか」を学内で十分に議論した上で学生の教育に当たってい

ただきたい。また、京都大学には京都学派と称され、我々に多大な影響を与えた方々の財産がある。それを支える図書館の存在は重要であり、このような学問を教える指導者を図書館に配置することも必要ではないか。

<教育の中身の充実>

真に教育に熱心な先生を育てることも重要である。学生にベストティーチャーを選ばせ、その人に対し給与面で処遇をすることなども先生方のモチベーションを高める一案である。また教育方法について、授業のメニューを沢山揃えるばかりではなく、大学として何を教えるべきかを考え、そのために必要な人材・予算を投入していただきたい。組織を整備することも大事であるが教育の中身の充実にも努力して欲しい。総長のリーダーシップのもと整備を進め、良い学生を育てていただきたい。

中国教育部から京都大学へ学術図書の寄贈

このたび、中国教育部から京都大学へ中国語・中国学に関する学術図書の寄贈があり、5月27日(月)、王泰平・駐大阪中国総領事が中国教育部を代表して本学を訪れ、贈呈式が行われた。

贈呈式では、王総領事から「中国の諸大学と京都大学との学術交流が今後ますます進展するように」との願いを込めて、中国語・中国学に関する図書1,005冊の目録が長尾 真総長に手渡された。

これを受け、長尾総長から「京都大学の附属図書館において大切に保存するとともに、本学の教育研究に

大いに活用させていただく」旨の謝辞が述べられ、感謝状と記念品が贈られた。

この後、王総領事、単耀忠教育担当領事は、長尾総長、塩田浩平総長補佐、佐々木丞平附属図書館長の案内で附属図書館を訪ね、陳列されている寄贈図書を視察した。

本学は、これらの学術図書が研究者・学生などに広く利用され、中国語・中国文化に関する教育研究が一層深まることを期待している。

博士学位授与式

5月29日（水）午前10時30分から，京大会館において，長尾 真総長，両副学長をはじめ，各研究科長，学舎長出席のもと，博士学位授与式が挙行された。



総長から，各授与者に対し学位記（5月23日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時10分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	課程博士	論文博士	計
文 学 研 究 科	1		1
経 済 学 研 究 科	8	1	9
理 学 研 究 科	9	3	12
医 学 研 究 科	14	10	24
薬 学 研 究 科	1	2	3
工 学 研 究 科	3	4	7
農 学 研 究 科	8	5	13
人間・環境学研究科	3	1	4
エネルギー科学研究科	2	1	3
計	49	27	76

創立記念式の挙行

6月18日（火）本学創立105周年記念式が，元総長，名誉教授，各部局長等関係者多数の出席を得て，本学総合体育館において挙行された。

式は午前10時に始まり，総長式辞，永年勤続者の表彰，永年勤続者代表寺谷愉利子さん（医学部附属病院）の答辞があり，午前10時40分終了した。

本年表彰された永年勤続者は，30年勤続者46人，

20年勤続者44人の計90人であった。

なお，表彰された方の氏名は，6月28日の学報第4814号に掲載されている。

また，総長室ホームページに式辞が掲載されている。

（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/soucho/home.htm>）



部局の動き

低温物質科学研究センターの設置

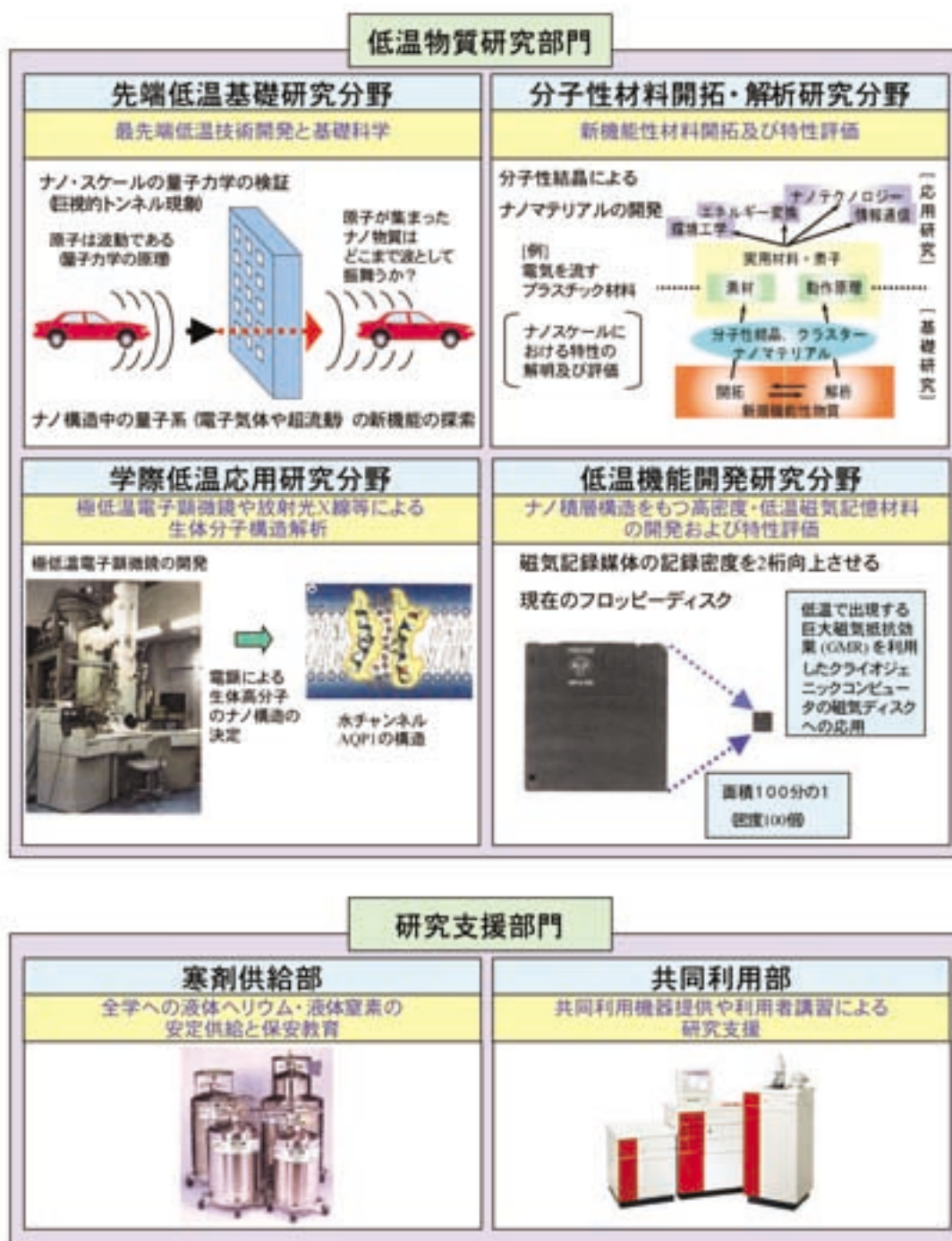
低温物質科学研究センター（Research Center for Low Temperature and Materials Sciences，センター長：水崎隆雄理学研究科教授）は、全学の低温物質科学研究の中核的組織として4月1日に発足しました。当センターの発足母体のひとつとなった理学部極低温研究室は、吉田キャンパスの約二千人の低温利用研究者に年間十万リットルの液体ヘリウム、三十万リットルの液体窒素の供給を行ってきました。今後は当センターがサービス先を吉田、宇治、桂の3キャンパスに拡大し全学を対象とする研究支援を行います。

さらに、寒剤利用者のための保安教育あるいは研究機器の全学共同利用やそれに伴う利用者講習などの研究支援を行うとともに、学生教育の場でも主導的に低温物質科学の基礎教育を行います。また、センターの機関紙を定期的に発行して、開かれた形で低温物質科学の研究教育活動の活性化を推進します。

新センター発足に伴い、京都大学のみならず世界の低温物質科学の発展への原動力となることを目標として、センター専任

教官による先端的な低温物質科学研究部門が設置されました。この研究部門のスタッフはセンター長の他に専任教官9名（教授4名、助教授2名、助手3名）となっており、図のように4分野が設置されています。

（低温物質科学研究センター）



宇宙太陽発電無線電力伝送システム披露式及び 第2回宇宙太陽発電所シンポジウム

京都大学宙空電波科学研究センターでは、宇宙太陽発電無線電力伝送システム（SPORTS；Space Power Radio Transmission System）の導入を進めていたが、このたび、2.45ギガならびに5.8ギガヘルツでの実験システムが宇宙太陽発電所研究棟（SPSLAB；Solar Power Station/Satellite LABoratory）とともに完成し、これらの新設備の披露式が6月7日（金）開催された。

これらの新設備は近年実現に向けての機運が高まっている宇宙太陽発電所SPS（Solar Power Station/Satellite）を研究するための最新鋭装置として、既設のマイクロ波エネルギー伝送実験装置METLAB（Microwave Energy Transmission LABoratory）と共に、学際的なSPS研究、産官学共同のSPS研究の拠点として今後利用されていくことになっている。

当日は、松本 紘宙空電波科学研究センター長の式辞の後、長尾 真総長や文部科学省研究振興局長の祝辞（小山晴己同局学術機関課課長補佐代読）をはじめ、本間政雄事務局長、松岡秀雄SPS研究会代表幹事以下、内外の関係者約200名の参加を得、完成を祝うとともに、感謝状の贈呈やテープカット、新装置の披露が行われた。

また、引き続き、第2回京都大学宇宙太陽発電所（SPS）シンポジウムも行われ、「産官学共同研究の将来と京大とSPS」をテーマに約160名の参加があった。本シンポジウムは昨年10月に引き続き行われたもので、披露式、シンポジウム共に盛況のうちに幕を閉じ、新聞報道やTVニュースでも取り上げられ、SPS関連の基礎学術技術研究へ内外の関心の高まりが実感された。

（宙空電波科学研究センター）



随想

カラコロムでのある夢語りから
一退役教官の方々への一提言

名誉教授 谷 泰

1962年のことです。学部時代、山岳部に属したわたしは、その年、そのOB団体である学士山岳会が組織した、パキスタン・カラコロムの未踏峰サルトロ・カンリ登頂をめざす登山隊に参加する機会をもちました。すで



に人文科学研究所の助手になり、いよいよ本格的に研究に集中しようとしていたときに、ヒマラヤでの未踏峰に挑む機会が訪れたのです。準備と海外滞在での数ヶ月、これから走り出そうとしていた研究の道から逸れて道草を食うことになる。ただ、以前からのあこがれは捨てきれず、研究所からの寛大な許可をえて参加したのでした。そして、その道草でえた現地経験は、それまで地中海地域での文献研究をしてきたわたしに、中近東地域への視野を拡げさせることになり、文化人類学的フィールド研究でのその後の実りを、わたしにもたらすきっかけとなりました。

そういう忘れがたいカラコロムでのこと、登頂成功の帰路、私たちはインダスの支流沿いの道を下っていました。川沿いの村々は、アプリコットが実る一見平和な村でした。しかし村に入ると作物も品種は貧弱、電気もまともな薬もない。輝く瞳をした子供は、つぎはぎだらけ、まさにぼろをまとっている。「もしわれわれが、それぞれの専門知識を結集し、登山に発揮した協調力で、これらの人々の生活改善のために努めたら、相当なことができるはずだな」ふとわれわれの間で、そのときこういう言葉がつぶやかれたのでした。

周知のように高所登山は、良質のテント、通信機器、食糧、医療など、様々な分野の専門知識と技術を結集してはじめて成功します。ただ当時十分な開発がなされてなく、企業の協力のもと、試作・改良を重ねる必要がありました。幸い、総合大学の山岳会の強み、隊員をはじめ、会員の中には理・工・農・医など、それぞれ各専門分野の専攻者がいて、種々の開発がなされました。貧しい村人の有様を見

て発せられたさきのつぶやきの背景には、この総合的知識集団としてのささやかな自負がこめられていたのです。ただ当時、隊員のほとんどは研究生活に入ったばかりの身分、帰国後、各々は自己の専門分野での自己実現に向かい、そのつぶやきは、過去の夢語りとして、記憶の片隅に追いやられたのでした。

そして40年、当時の若き研究者も定年を経て70歳になろうとする、そんな最近のある日のことです。当時の隊員で、アフガニスタンの最高峰ノシャック(7,492m)の登頂者でもある岩坪五郎(農・名誉教授)が、アフガニスタンへの直接援助も必要だが、長い目で見た国の自立は知的人材の育成にある。われわれ退役教官が、現地の大学での教育支援をもって、高等教育への貢献ができないかと言いだしたのです。そして、いまや定年を過ぎた会員に趣旨が伝えられ、意外にも多くの積極的応答がえられました。こうして会の一部で、かつてつぶやかれた夢語りを正夢にする動きが始められているのです。

それにしても、なぜこんな動きについて報告したのか。その理由のひとつは、平均年齢の高まりとともに、なお元気盛んな退役名誉教授が増えている事実、しかもこういった貢献意欲をもちながら、その情報が専門領域を超えては交流されない事実を思っていることです。もちろん、なお多くの名誉教授が、ODAやJAICAなどを通じて、高等教育機関での援助に貢献しておられることは知っています。しかしそれらは、政府援助の枠内でなされがちです。大学という中立的立場、しかも多分野の専門知識を擁する退役教官という枠組みで、高等教育のための多分野貢献への意欲情報をプールすることができないか。アフガン計画は、その一つのテストケースとしてでも実現に向けたい。こんなことを、自分本来の仕事の続けながら考えています。もしこういった計画と提言に関心・助言をお持ちの方はE-mail address: goandrei@green.an.egg.or.jpに、ご意見をお寄せいただきたいと思います。

(たに ゆたか 元人文科学研究所教授、

平成9年退官、専門は文化人類学)

今にして思う京都大学時代

名誉教授 丸山 利輔

1997年に京都大学を停年退官し、約半年のリチャージの期間を経た後、日本大学生物資源学部に1年半勤務し、その後転職して、現在の短大に奉職している。停年退官後わずかの間に日本第一のマンモス大学と多分日本第一のミニチュア大学を経験したことになり、京都大学がことさら羨ましくもなり、懐かしくもある。と同時に現役の時代にこうしておけば良かった、ああしておけば良かったと思うことも多い。



京都大学は教官・学生・研究施設の面で私立大学や短期大学とは格段の差がある。特に教官・学生の質には格差が大きい。しかし、研究施設、特に建物のスペースとなると必ずしも大きな差があるとはいえない。むしろ、短期大学の方が余裕があったりする。私立大学で150 - 170人も学生を相手にマイクを持ち、専門の講義をする様子を考えてみて下さい。とても大多数の学生に内容を理解させるような講義は困難なようです。この点だけでも京都大学の学生は恵まれているといって良い。京都大学だからこんなことは当然と考えているかも知れないが、高額授業料を支払っている私立大学の学生がこのような状態であることを、学生諸君には気に留めてもらいたい。この特権を有意義に活用してもらいたい。短期大学ではこのような多数の学生を相手に講義をすることはないが、一方、教員・学生とも優秀な大学にはとても叶わないという思い込みが強く、これを払拭するのは容易ではない。

京都大学では、良き学生、良き教官、良き先輩に恵まれていたにもかかわらず、この良い条件を十分に生かしきったかと忸怩たる思いを捨て切れない。特に、学部長時代には専門を越えて立派な先生に巡り合え、一言二言の会話の中で多くのことを教えていただいた。この先生方が、現在社会の第一線で活発に活躍されており、今日この頃勇気づけられることが多い。

他方、学内には優れたいろいろな専門の先生が多くおられたので、積極的に意見を交換し、研究教育

に生かせば良かったと反省することしきりである。特に、学問以外の人間関係についても、多くのことを学ぶことができた。学園紛争の頃、朝まで付き合っただけで苦労を共にした先生方とは心からお付き合いすることが出来、その後の研究・教育は勿論のこと、大学の管理運営にも大きな影響を及ぼした。今にして思えば、現役の頃、もう少し積極的に他学科・他学部の教官とお付き合いすればよかったと残念だ。また、大学院生の研究指導をもう少し時間をかけ、真剣にやれば良かった。勿論、当時の学生指導に手を抜いたという思いは無かったが、忙しさにかまけ、結果的に手を抜いたことになりはしなかったかと心配である。

今、京都大学の先生方、特に私の在席した学部・学科の先生方に御願いしたいことは、良き後継者の養成のために、多忙な中にも学生の研究指導、人間形成には格段の労力を払い、他大学に優秀な人材を送って頂きたいということだ。現在の状態では京都大学や東京大学など中心的な大学から優秀な人材を送っていただかない限り、良い私立大学や地方の大学は成立しないような気がする。政府の仕事や学外の仕事は他の大学の教官に分散して御願いしても良いが、良い教員の育成は一部の大学にしかできないことだ。余人をもって替えがたい重要な仕事を分担しておられるのですから。

(まるやま としすけ 石川県農業短期大学学長、元農学部教授、平成9年退官、専門分野は農業工学)

洛書

木の下石碑

金 文 京

本部構内、正門を入れて時計台前の広場を左に附属図書館の方へ行くと、向かって右手に大きな楠がある。その木の下に石碑がひとつ立っているのをご存じだろうか。石碑には次のような漢文による短い文章が刻まれている。



此樹木下祭酒時徳富淇水翁所贈。忽忽二十餘年，祭酒既捐館，翁亦歸道山。而樹則蔚然日碩茂，使過者永懷遺愛焉。大正十二年六月下浣，京都帝國大學總長荒木寅三郎識。

句読点は筆者が便宜上つけたもので、原文にはない。これを訓読すると、こうなる。

この樹は木下祭酒の時、徳富^{きすい}淇水翁の贈るところ、忽忽として二十余年、祭酒はすでに館^すを捐て、翁もまた道山^{どうざん}に帰せり。しかして樹はすなわち蔚然^{うぜん}として日々に碩茂^{せきぼ}し、過ぐる者をして永く遺愛^{なが}を懷^{おも}わしむ。大正十二年六月下浣^{しる}，京都帝國大學總長荒木寅三郎識す。



祭酒というのは、昔の中国の都にあった国子監という、今でいえば国立大学に相当する学校の長を言い、つまり総長のことである。木下祭酒は木下総長、すなわち京都帝国大学初代総長、木下廣次（明治30年から40年まで在任）である。徳富淇水は、明治から昭和にかけての言論人、文学者として有名な徳富^{そほう}蘇峰^{ろか}、蘆花兄弟の父、徳富一敬のことで、淇水はその号である。館^すを捐て、道山^{どうざん}に帰す、はどちらも死ぬことだが、前者はおもに貴族や高級官僚などに、後者は在野の人に用いる。つまりこの木は木下総長の時に徳富一敬の寄付で植えたが、それからあっという間に二十余年が経ち、二人ともすでに故人となった、しかし木は日々に大きく茂り、そのかたわらを通りすぎる人をして故人の遺徳をしのばせてくれる、という意味である。書いた人は、第七代総長の荒木寅三郎（大正4年から昭和4年まで在任）、時は大正十二年六月下浣（下旬）であった。

徳富淇水がなぜ京大に樹木を贈ったのかはさだかでないが、おそらく彼が木下廣次と同じ熊本県人であったことと関係しよう。石碑の裏には「徳富猪一郎建」とある。猪一郎は蘇峰の名。徳富蘇峰は大正十二年、『近世日本国民史』によって学士院恩賜賞をもらっているから、あるいはその記念に父をしのんで、この碑を立てたものか。「過ぐる者をして永く遺愛を懷わしむ」とあるが、今や毎日かたわらをせわしく通りすぎるあまたの学生、教官、職員の中に、この碑文を顧みる人がはたしてどれだけいるであろう。

本部構内は狭い敷地に多くの建物がひしめいて、お世辞にもいい環境とはいえない。歴史をしのばせるモニュメントにもとぼしい。たとえば東大の本郷キャンパスに、三四郎池や多くの銅像、碑があるのとは段違いである。しかし東大の銅像が人を威圧するようにいかめしく、碑文も美辞麗句をつらねて仰々しいのにくらべ、この石碑は歳月を経て、まるで忘れられたかのように人知れずひっそり立っているところが好ましく、木の下にあって「木下祭酒」というのも巧まざるユーモアが感じられ、「遺愛を懷う」かどうかは別として愛らしい。最近、構内の

あちこちではしきりに工事が行われており、大学の景観は大きく変わろうとしている。この石碑も工事現場の塀に隠れてしまったが、先日この一文を書くため、許可をもらって塀の中に入り、工事責任者に

尋ねたところ、石碑はもとのまま残すということで、ほっとした。

(きん ぶんきょう 人文科学研究所教授)

訃報

このたび、^{さいが あぼろ}雑賀亜幌名誉教授、^{ひらおかけんじ}平岡憲司原子炉実験所経理課経理掛主任、^{たぐちよしひろ}田口義弘名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

雑賀 亜幌 名誉教授



雑賀亜幌先生は、3月19日逝去された。享年77。

先生は、昭和22年京都帝国大学理学部化学科を卒業、同大学大学院、米国イリノイ大学大学院で学ばれた後、姫路工業大学講師、同助教授、神戸大学助教授を経て、同40年京都大学理学部教授に就任し、構造化学講座を担当された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和63年から平成7年まで樟蔭東

女子短期大学教授を努められた。

先生は、核磁気共鳴(NMR)の分野で優れた研究業績を残された。とくに、化学シフトの理論計算法を提案し、磁気共鳴スペクトルが分子の構造究明に重要な役割を果しうることを示した研究は極めて有名で、多くの論文や著書に引用されている。その後、多体摂動論を導入し、化学シフトおよび間接核スピン・スピン結合定数の計算の精密化を試みられた。核磁気共鳴の黎明期から理論、実験の両面にわたって、基礎的方法の開発に尽力された功績は高く評価されている。(大学院理学研究科)

平岡 憲司 原子炉実験所経理課経理掛主任

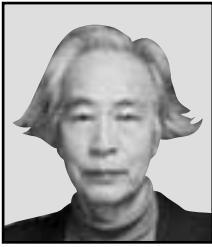


平岡憲司氏は、5月30日逝去された。享年54。

同氏は、昭和41年原子炉実験所に就職され、以来永年にわたり主に原子炉実験所の経理関係業務に尽力された。

また、平成9年には、京都大学永年勤続者表彰(30年勤務)を受けられた。(原子炉実験所)

田口 義弘 名誉教授



田口義弘先生は、6月1日逝去された。享年69。

先生は、昭和31年京都大学文学部を卒業後、同大学院文学研究科で学ばれた後、青山学院大学法学部専任講師を経て、同36年京都大学教養部講師に就任、同39年助教授、同59年教授を経て、平成4年京都大学総合人間学部配置換えとなり、ドイツ語及び文芸論を担当されるとともに、文学部及び大学院文学研究科においてはドイツ文学や宗教論、大学院人間・環境学研究科においては象徴記号論を担当された。平成8年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、近畿福祉大学の教授を務められた。

先生のご専門は現代ドイツ文学で、ライナー・マ

リア・リルケ、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール及びネリー・ザックスなどの文学や思想の解明において数多くの優れた業績を残された。とりわけリルケ研究の分野においては、この詩人の代表作の一つ『オルフォイスへのソネット』に関する画期的な労作によって斯界の第一人者となられた。またマルティン・ブーバーに関する研究を通じて、ユダヤ思想の解明にも寄与された。さらに先生は、『リルケ全集』、『ゲーテ全集』、『ブーバー著作集』、『カロッサ全集』などの翻訳事業に参画され、その優れた翻訳によって文学や思想の研究に大いに貢献された。

また先生は、日本独文学会及び日本エスペラント学会に所属され、四季派学会の理事、財団法人日独文化研究所の評議員を長らく務められた。

(総合人間学部)

日誌 2002.5.1 ~ 5.31

- 5月2日 国立大学の法人化に関する全学説明会
- 7日 セクシュアル・ハラスメント窓口相談員のための研修会
- 13日 学生部委員会
- 15日 京都大学・関西フォーラム
- " 国際交流委員会
- 24日 同和・人権問題委員会
- 27日 中国語・中国学に関する図書贈呈式
- 28日 評議会
- 29日 博士学位授与式
- 31日 人権問題対策委員会

話題

総合博物館開館 1 周年記念行事「総合博物館の展示を語る」を実施

総合博物館では、博物館開館 1 周年を記念して、6 月 1 日（土）「総合博物館の展示を語る - 文系・理系教官競演」と題した展示説明会を実施した。

当日は、瀬戸口烈司総合博物館長の開会挨拶に始まり、展示場中央にあるミュージラボを使用して、「芦生の森の花と昆虫の共生を語る」、「考古学展示を語る」、「化石展示を語る」と題して、常設展示のハイライトについての解説が行われた。

この解説には、それぞれの展示に造詣の深い博物館の専任教官があたり、普段の解説パネルからだけでは伝わらない展示の意味や、展示意図、展示されている研究成果についてのエピソードを交えた解説が行われた。この広い分野にまたがる専門家を擁する博物館ならではの企画に、参加者からは、再度の実施を望む声が聞かれた。

なお、今回は小学 5 年生以上を対象に募集したが、



開会の挨拶を行う瀬戸口館長

これまでの同館における催しの評判もあり、最終的には定員をはるかに超える 70 名の参加者があった。

（総合博物館）

文学研究科フォーラムを開催

文学研究科は 6 月 15 日（土）、京都会館第 2 ホールにおいて国際フォーラム「京都から世界へ - 地の次なる一歩」を開催した。

長尾 真総長、紀平英作文学研究科長の挨拶の後、日本美術研究の権威であるジョン・ローゼンフィールド米国ハーバード大学名誉教授による講演「日本文化の転生 - 重源の事跡」が行われ、平家に焼かれた東大寺の再興に尽くした俊乗坊重源の事跡を鋭い視点から考察し、スライドを交えてわかりやすく論じた。

続いて行われたシンポジウムでは、海外からヴァレリー・ハンセン米国イエール大学教授、葛兆光中国清華大学教授を、また、司会として柏倉康夫放送大学教授を招き、本学からは中西重忠医学研究科長のほか佐々木丞平文学研究科教授（附属図書館長）、内井惣七文学研究科教授、伊藤邦武文学研究科教授を交えての白熱した議論が行われ、詰めかけた一般市民を含む約 800 人の参加者は、皆一様に熱心に聴き入っていた。

なお、本フォーラムの様子は、8 月 9 日（金）午後 11 時から NHK 教育テレビ「金曜フォーラム」にて放映される予定である。（大学院文学研究科）



お知らせ

総合博物館特別企画展始まる



総合博物館では、6月1日から9月1日までの間、「薬と自然誌」と題する特別企画展を開催している。身近にある「薬」をテーマに選りながら、総合大学である京都大学の幅広い研究成果を生かし、薬物利用の起源から、動物による薬物の利用、さらにはフェロモンやそれを応用した害虫駆除などを紹介している。具体的には、「人とくすり」「動物と薬」「農業とくすり」「昆虫・植物とくすり」などの各コーナーを設け、京都大学が有する生薬類、彩色画、本草書、海外学術調査やフィールドワーク等で得られた調査資料の実物などの展示を行っている。また、本草学の古典の展示から薬という化学物質の研究の最前線までを、幅広く分かりやすく展示している。さらに、7月27日と8月3日には、公開講座「薬と自然誌」が併せて開催される。

なお、詳細は総合博物館のホームページに掲載している。(<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>)

また、総合博物館の開館時間は、月・火曜日を除く毎日、9時30分～16時30分までである。(ただし、入館は16時まで。)

(総合博物館)

編集後記

本学へ赴任して4年になります。

大学には広報の編集会議を含め少なからぬ数の委員会があり、これらに出席する事は研究の時間を削られることであり、個人的にはあまり好ましくない“雑用”であります。このような、私にとっては“雑用”である委員会に加わり、他の先生方と接しますと、そこには“京大らしさ”があります。それは、殆ど全ての教員が“研究好き”であるということです。「どのような御研究をされていますか？」と尋ねると、目を輝かせながら自らの仕事の夢を語られる。そこには必ずといっていいほど、研究者としての強い個性と情熱が感じられます。

一方、関東の有力大学の先生方は、概して言葉遣いが丁寧で、学会の世話役なども進んでなさり、それぞれの研究領域の最新の動向（流行）もよく御存知です。機をみて流れに乗る能力にかけては、本学の先生方の比ではありません。これに対して本学が目指すべきは、時流に媚びることではなく、学問を熱く語りつづけることにあるのでしょうか。

願わくば、本広報が“研究好きの”先生方の知の交流に少しでも役立ち、次の時代を担う若者の心を奮い立たせることにつながればと思う昨今です。

(吉川記)